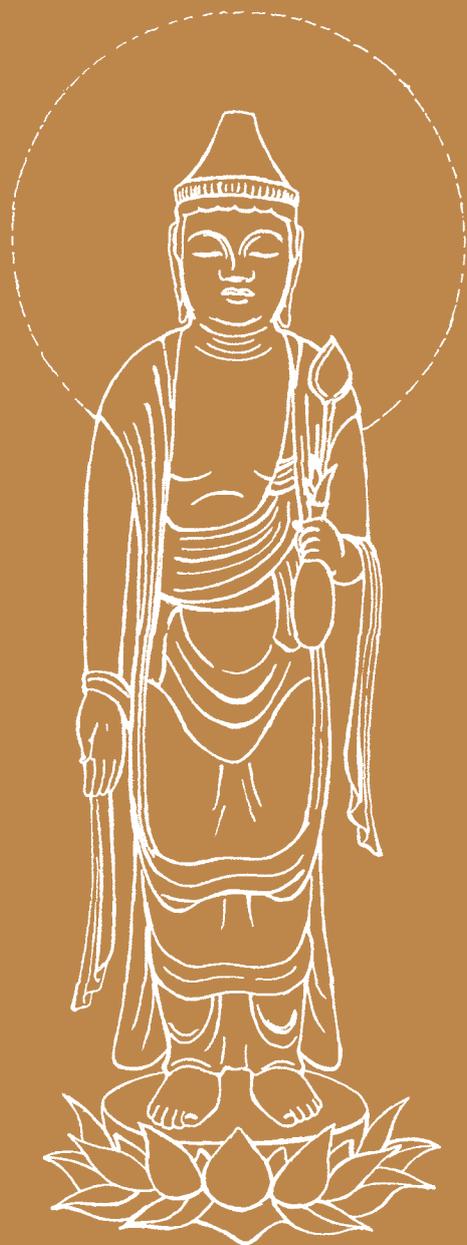


平成 29 年度 飯豊町遺跡発掘調査報告書(3)

飯豊町教育委員会埋蔵文化財調査報告書第 7 集



2018年
飯豊町教育委員会



序

本書は飯豊町教育委員会が平成29年度に実施した町内遺跡発掘調査事業の成果を報告するものです。本年度は埋蔵文化財行政の推進を目的として国庫補助を受け、飯豊町内の遺跡の分布調査を実施しました。

飯豊町には70か所を超える埋蔵文化財包蔵地が登録されており、縄文時代を中心に各時代の遺跡が所在しています。特に当地は中世に長井氏・伊達氏の支配地域であったことから、中世の城館跡が多数みられます。

飯豊町ではこのような文化財を活用した事業を進めており、埋蔵文化財についても分布調査を行うことで、正確な把握と記録、町内外への情報の発信、活用を進める取組みを行っています。今年度は、中地区の天養寺跡周辺および手ノ子地区の西館跡周辺の分布調査を実施しました。

埋蔵文化財は、私たちの祖先が長い歴史の中で創造してきた貴重な地域財産です。この財産を大切に保護するとともに、そこから歴史を学び子孫へ伝えることが現代に生きる私たちの責務だと考えます。今後、本書が文化財の保護活動、学術研究、教育活動等に役立つことになれば幸いです。

最後に当調査にご支援ご協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

平成30年 3月

飯豊町教育委員会

教育長 熊野 昌昭

例 言

- 1 本書は、飯豊町教育委員会が国庫補助を受けて実施した町内遺跡詳細分布調査の報告書である。
- 2 事業期間は平成29年4月1日から平成30年3月31日までである。
- 3 調査体制は次のとおりである。
調査主体 飯豊町教育委員会
発掘調査・資料整理担当者
調査員 高橋拓（社会教育課生涯学習振興室 主事）
発掘作業員 伊藤憲之、井上芳子、奥山三男、佐藤節夫、鈴木春男、鈴木昌利、
高橋純、土屋秋夫、秦昭繁、船山健信（五十音順）
整理作業員 長岡千明
事務局 飯豊町教育委員会社会教育課生涯学習振興室
遠藤純雄（社会教育課課長）
伊藤敏英（社会教育課生涯学習振興室室長）
- 4 調査並びに報告書作成にあたり、次の方々にご指導ご協力をいただきました。ここに記して感謝を申し上げます。（五十音順、敬称略）
瀧上舞、斗叶冬樹、長岡英雄、山形県教育庁文化財生涯学習課
- 5 報告書の編集・執筆・写真撮影・挿図は高橋拓が担当した。

凡 例

- 1 本報告書の遺構図中の用例は以下のとおりである。
 - (1) 図中の方位記号が指し示す方向が磁北を示す。
 - (2) 図中の水系はすべて海拔高度を示す。
 - (3) 縮尺率はそれぞれ図中に示した。
- 2 本報告書の遺物の実測図中の用例は以下のとおりである。
 - (1) 原則は1/4で採録し、各々にスケールを付した。
 - (2) 遺物番号は、遺物図版・写真図版ともに共通のものとした。
- 3 遺構の写真図版については任意の縮尺とした。
- 4 土層の色調に関しては小山正忠・竹原秀雄編著『標準土色帳』（日本色研株式会社、1967年）を基準に視認している。
- 5 本書で使用了遺構・遺物を指し示す略号は以下の通りである。

P…柱穴 SK…土壙 SW…河川跡 C…土器、陶磁器 S…石、石器 W…木

目 次

1. 分布調査	
1-1. 調査の目的	1
1-2. 調査地点	1
2. 中区 天養寺館周辺の分布調査	
2-1. 調査の経緯	2
2-2. 遺跡の環境	2
2-3. 歴史的環境	2
2-4. 調査の経過	3
2-5. トレンチ調査	3
2-5-1. 観音堂と観音堂の階段周辺に設定した トレンチの調査結果	
Aトレンチ	
Bトレンチ	
Cトレンチ	
Dトレンチ	
Eトレンチ	
2-5-2. 不動堂・天養寺跡周辺	
Fトレンチ	
Gトレンチ	
Hトレンチ	
Iトレンチ	
Jトレンチ	
Kトレンチ	
2-5-3. 推定弁天堂周辺トレンチ L、Mトレンチ	
2-5-4. 石仏集中地点トレンチ Nトレンチ Oトレンチ	
2-6. 炭素年代測定の結果	6
2-7. 調査結果	7
3. 手ノ子区 西館周辺の分布調査	
3-1. 調査の経緯	18
3-2. 遺跡の環境	18
3-3. 歴史的環境	18
3-4. 調査の経過	19
3-5. 手ノ子地区における トレンチ調査の結果	19
3-5-1. 西館周辺のトレンチ調査	19
トレンチ1	
トレンチ2	
トレンチ3	
3-6. 炭素年代測定の結果	20
3-7. 手ノ子地区西館周辺の調査結果	20

挿図目次

図1	飯豊町北部遺跡地図	2
図2	観音堂と観音堂の階段周辺に設定した トレンチ配置図	8
図3	A、B、C、Dトレンチ断面図・ 階段エレベーション図	9
図4	Eトレンチ平面図・断面図・ 階段エレベーション図	10
図5	不動堂・天養寺跡周辺トレンチ配置図	11
図6	F、G、Jトレンチ断面図	12
図7	Kトレンチ平・断面図	13
図8	推定弁天堂周辺トレンチ平・断面図	14
図9	推定弁天堂周辺トレンチ断面図	15
図10	石仏集中地点トレンチ平・断面図	16
図11	飯豊西部遺跡地図	18
図12	手ノ子西館周辺平面図	22
図13	手ノ子西館周辺トレンチ断面図（1）	23
図14	手ノ子西館周辺トレンチ断面図（2）	24

表目次

表1	飯豊町北部遺跡一覧	2
表2	天養寺周辺炭素年代測定資料の一覧	17
表3	天養寺周辺炭素年代測定の結果	17
表4	飯豊町西部遺跡一覧	18
表5	西館周辺炭素年代測定資料の一覧	25
表6	西館周辺炭素年代測定の結果	25

写真図版

写真図版1	28
写真図版2	29
写真図版3	30
写真図版4	31
写真図版5	32
写真図版6	33
写真図版7	34
写真図版8	35

1. 分布調査

1-1. 調査の目的

近年、飯豊町では遺跡の所在地周辺で開発が行われる可能性が高まっている。本町では74ヶ所の遺跡が確認されているが、そのほとんどが表面踏査によるもので遺跡の詳細は不明な状況にある。また周知されていない遺跡の存在も多数予測されている。

このようなことから飯豊町としては、周知の遺跡については遺跡の詳細を明らかにし、また未周知の遺跡についてはその存在を確認することで遺跡台帳の整備をすすめ、今後起こり得る開発行為に対処する必要があると考えている。よって遺跡台帳に反映させるデータを得る目的で、平成28年度に引き続き、平成29年度も遺跡の詳細分布調査を実施した。

埋蔵文化財包蔵地及び包蔵の可能性がある土地において踏査・試掘調査を行い、遺跡の有無・範囲・性格など、内容を明らかにする調査を実施した。この調査によって得られた成果は、今後各種開発計画との調整に役立ち、遺跡の保護・保存のために活用されるものである。なお今年度遺跡詳細分布調査を行った地点は以下の2箇所である。

1-2. 調査地点

(1) 中区 山形県西置賜郡飯豊町大字中

天養寺館周辺を調査地点とした。小規模なトレンチによる試掘をもとに遺構の有無、または残存状況を確認した。この調査によって遺跡台帳の情報整理を行う。

(2) 手ノ子区 山形県西置賜郡飯豊町大字手ノ子

手ノ子西館周辺を調査地点とした。小規模なトレンチによる試掘をもとに遺構の有無、または残存状況を確認した。この調査によって遺跡台帳の情報整理を行う。



天養寺観音堂



手ノ子西館遠景



天養寺館跡調査風景



手ノ子西館トレンチ調査風景

2. 中区 天養寺館周辺の分布調査

2-1. 調査の経緯

飯豊町中区には室町時代の建造といわれる県指定の「天養寺観音堂」と平安時代の造作である本尊の「聖観音立像」がある。地元の中区協議会ではこれらの文化財を中心に天養寺館周辺に散策路などを設け歴史公園化する整備計画があり、今後埋蔵文化財との兼ね合いが課題となる可能性が高い。よって今年度当地周辺の遺跡・遺構・遺物の状況を確認する分布調査を実施した。

当地には館や寺院の痕跡と考えられる掘跡や通路、礎石などの遺構が地表に確認できる。しかし近年、推定遺構包蔵地で、重機を使った枯木の運び出しなどを行っており、遺構が破壊されていることが予想されていた。本調査の実施によって今後整備計画が進展し開発が行われることになった場合、また再び重機を当地内で運用するような場合、調整のために有効なデータを遺跡台帳に提示することができる。

2-2. 遺跡の環境

調査地は飯豊町の北端に位置する中区である。北東は長井市、南は飯豊町萩生区に隣接し、西方には朝日連峰の南端に連なる山地が広がる。この山地は西山と呼称されており、主峰は三体山と呼ばれる。この西山から東流する川の一つに尻無川がある。この川は水流が乏しく、地層の問題で流下する内に水が地下浸透することから下流では水がなくなる。よって尻無川と呼ばれているという。この尻無川の左岸舌状台地上に、かつて天養寺という寺院があり、一段高い山腹に天養寺が管理した観音堂が所在している。そしてこの周辺の丘陵部に中世の山城跡と推測されている天養寺館が所在している。

2-3. 歴史的環境

調査地に所在する天養寺館は、伊達時代の山城だと考えられているが、この城の存在を示す史料や伝承はない。現地表に虎口や掘跡らしき地形が確認できることから、城跡として認識されてきたと考えられる。城主や築城年代についても不明である。

同地内にある観音堂は元来「中村観音堂」と呼ばれていた。しかし昭和30年に県に指定された際「天養寺観音堂」の名で申請したことから、以後県指定文化財としての正式名称が天養寺観音堂となった。地元では



図1 飯豊町北部遺跡地図

遺跡番号	遺跡名	年代
403-001	中村館	
403-002	契約壇遺跡	縄文中期
403-003	野山Ⅰ遺跡	縄文時代
403-005	沼之尻遺跡	縄文時代
403-006	堰場遺跡	縄文晩期
403-007	台の上遺跡	縄文時代中期
403-008	郡の袖南遺跡	縄文時代
403-014	町下遺跡	縄文時代 不明
403-032	長者原遺跡	縄文時代
403-033	添川古館	
403-034	添川館	
403-035	黒沢中館	
403-036	柳沢B遺跡	縄文時代
403-037	裏山Ⅱ遺跡	縄文晩期
403-039	裏山Ⅲ遺跡	縄文時代
403-040	野山Ⅲ遺跡	縄文時代
403-041	才先林遺跡	縄文前期
403-042	横山遺跡	縄文前中期
403-043	館の宮	
403-044	野山Ⅱ遺跡	縄文前期?
403-045	中村荒館	
403-046	中川原遺跡	縄文時代中期、後期
403-048	下野遺跡	縄文中期
403-049	手ノ子南館	
403-050	柳沢A遺跡	縄文時代後期、中期
403-052	黒沢館	
403-053	椿館	
403-054	黒沢南館	
403-055	野山Ⅳ遺跡	縄文時代
403-056	萩生城	
403-057	館ノ越	
403-058	裏山Ⅰ遺跡	縄文晩期
403-059	町屋敷	
403-060	手ノ子西館	
403-061	野山Ⅴ遺跡	縄文中期?
403-063	観音堂遺跡	縄文時代
403-065	天養寺館	
403-066	上野遺跡	縄文時代
403-067	石箱遺跡	縄文時代後期、中期、古代(平安)
403-068	新山遺跡	縄文時代
403-069	椿古館	
403-070	剣堂遺跡	縄文時代後期、中期、大木9古
403-072	椿焼裏山窯跡	近世

表1 飯豊町北部遺跡一覧

今でも中村観音堂の名称が併用されている。観音堂の内陣にはかつての古い扁額が納められている。この扁額には、応永21年（1414）に観音堂が再建されたことが五言四句から成る漢文の偈（げ：仏の功德を褒め称える詩）によって記されている。末尾には寛正7年（1466）にこの扁額が奉納されたことも記されていることから、この扁額を根拠に15世紀には当地に観音堂があったと考えられている。観音堂はかつて当地にあった天養寺が管理していたが、昭和22年2月24日の朝に天養寺が全焼。その後、寺が再建されることはなく、昭和23年には跡地に小さな不動堂が建てられた。現在、お堂は檀家で管理している。観音堂の内陣の中にある宮殿の屋根部分には三つの家紋が横に並んで記されている。両脇は豎三つ引両、真ん中のみ縦横七条の線が交差する石畳状の家紋である。豎三つ引両は伊達の家紋であると想定されるが、縦横七条の紋に関してはどの家の家紋か不明である。この中心の家紋の主が観音堂の造営者であることが想定される。当地周辺には天授6年（1380）頃に菰生に入った国分政信を初代とする国分氏がおり、観音堂の造営者は国分氏であるという伝承もある。しかしこの家紋は国分氏のものではない。別な伝承では中村日向守という人物が中区の荒館というところに居住していたとも伝わっている。しかし史料にこの人物は確認できない。中村郷の領主として史料に確認できる人物としては布施備後守がいる。ただし布施家についても家紋が不明であることから、観音堂の造営主として確定することはできない。この点については今後調査を進める必要がある。少なくとも伊達時代に当地にお堂があった可能性は高い。またお堂後方の山腹には石仏が並ぶ平場、旧天養寺から観音堂への裏道沿いには弁天堂があったことが推測されている掘で方形に区画された場所があるなど、かつての天養寺館や天養寺の遺構とみられる場所が周辺各所に今も残っている。

2-4. 調査の経過

2017年6月15日～17日 調査準備
2017年6月18日～7月15日 天養寺観音堂階段周辺、天養寺跡地試掘
2017年7月21日～22日 天養寺跡地試掘
2017年7月25日 観音堂裏側斜面中腹試掘
2017年9月9日～12日 各所実測作業、写真記録
2017年9月13日～14日 弁天堂跡地（仮）試掘
2017年9月15日～20日 各所実測作業、写真記録
2017年9月21日 埋戻し、安全確保作業
2017年12月～2018年3月 報告書作成

2-5. トレンチ調査

遺構の有無、残存状況と範囲の確定のため、観音堂周辺、観音堂への階段周辺、不動堂・天養寺跡周辺、推定弁天堂周辺、観音堂裏の山腹にある石仏集中地にトレンチを設定して分布調査を実施した。

2-5-1. 観音堂と観音堂の階段周辺に設定したトレンチの調査結果（図2）

・Aトレンチ（図3）

Aトレンチは観音堂の東側平場に設定した。現存の観音堂以前に古い観音堂が存在した可能性が高いことから、その遺構もしくは天養寺館の遺構を確認する目的で設定した。変則的な形であるが幅100cm、総長が1130cmのトレンチである。結果として落葉や雑草を由来とする4～5cmの表土が1層として堆積し、その直下に地山と考えられる層が確認できた。地山層は10YR4/4褐色土に泥岩の破片を含む層で、お堂後方の斜面が崖崩れなどを起こして堆積した

土層だと推定する。またお堂近くの表土層から数点の木質を採取した。これらが古い建物の部材である可能性も考慮し、このうちの4点について炭素年代測定を山形大学（YU-MSYグループ）に依頼した。

・ Bトレンチ (図3)

Bトレンチは観音堂正面に敷設されている石段の西側に設定した。観音堂への参道が階段の踊り場でL字に折れ曲がる不自然な配置となっていることから、かつての古い観音堂に適合する直線的な石段があったものが、ある時期のお堂の改修に伴い、現在のお堂の位置に合わせてL字形に付け替えられたことが想定された。より古い時期の階段が周囲に埋没している可能性を考え、現在の石段の横にこのトレンチを設定した。幅100cm、長さ160cmの南北方向のトレンチである。1層はAトレンチの1層に相当する表土層である。2層はビニールや空き缶が出土する現代層。3層は黒色土でしまりが無く、現代ゴミが混ざることから、2層が堆積する以前に現代まで現れていた表土層だと判断した。観音堂において昭和58年にお堂の全面的な改修工事が行われていることから、その際に埋められた表土の可能性が高い。4層は地山由来と推測できる10YR4/4褐色土で1cm～人頭大の礫を複数含む層である。土質的には地山に類似するが、面加工された凝灰岩が出土しており、地山ではない。また表土より110～140cmの場所から人頭大の自然石が数個検出された。石段の一部の可能性も考えたが、積み上げた痕跡は確認できなかった。

・ Cトレンチ (図3)

CトレンチはBトレンチの南側、階段の踊り場全体を覆う表土層を剥がすもので、石列や石敷きなどの旧遺構を確認する目的で設定した。踊場の北側の斜面に切り込むようにトレンチを設置し、Bトレンチで検出された自然石との遺構の連続性を確認した。

1層は腐食土による表土層で、その下の2層がBトレンチの4層に相当する層だと考えられた。3層は礫含みの黄褐色土で地山が崩落した土の可能性が考えられた。その下に地山とみられる層が堆積している。階段の平場全体は表土層で覆われており、これを除去することで、隠れていた石列などの遺構を検出した。表土からはビンやカンなどの現代ごみが出土し、近年までこれらの遺構が地表に現れていたことが分かった。踊場北側の地山層直上に自然石の石列が横並びに検出された。かつての石段の可能性も考えたが観音堂に向かって連続はせず、確証を得ることはできなかった。このようなトレンチの状況から、もし古い時期の石段があったとしても撤去・破壊されている可能性が高いことが分かった。また踊場の中心には正面に「敷石供養」と刻まれた石碑が建っている。右面には「嘉永三年庚戌八月廿□」とあり、この時期に石段になんらかの変容があったことが推測される。

・ Dトレンチ (図3)

DトレンチはCトレンチの東側、腐食土層の下にわずかに見えていた石畳周辺に設定した。この石畳はかつての天養寺の寺域を構成することが推測されたことから、状況を明らかにするため、一部に土層観察のためのベルトを残し石畳を明らかにするトレンチとした。1層が表土層で、この直下に石畳が敷設されている。また階段から見て石畳の奥には手水場と見られる遺構が確認できた。石製の手水鉢が石畳の上に張られたコンクリートに固定されており、近辺にはビニルパイプと金属の蛇口が確認できた。また1層からは陶磁器、ガラス、金属など、近現代のゴミが出土することから、Cトレンチの石段の平場同様に近年までこれらの遺構は地表に現れていたことが理解できた。しかし、コンクリートが張られているのは石畳の上であることから、石畳自体はこの手水鉢や蛇口の施工と同時期のものではないと推測される。階段から石畳への入口付近に「天明七年六月十七日」(1787)の年号が刻まれた標柱があることから、当石畳については近世期の遺構だと推測する。

・ Eトレンチ (図4)

Eトレンチは現在の観音堂から約25m東に移動した場所に設定した。観音堂が建っている平場から南東側の傾斜の腐食土層の下に階段遺構が見えていたことから、状況を明らかにするため一部に土層観察を目的としたベルトを残し、階段を現すためのトレンチを設けた。上部では1層が表土層でその直下に階段が敷設されている。下部では重機による轍が見られ、その下の石階段は割れてしまっている。土層については表土の下に地山由来の土の堆積がみられ、重機による攪乱があったことが想定される。

階段の半ばに転倒した石碑があり正面に「階供養」と刻まれている。碑の右側には「萬延元申年六月吉日 一村中」とある。この時期に石段の使用を止めたことに対する階段への供養塔なのか、施工の記念碑なのかは判断できない。

2-5-2. 不動堂・天養寺跡周辺 (図5)

・ Fトレンチ (図6)

天養寺跡に建てられた不動堂の南東部に十字のトレンチを設定した。1層が落葉などによる表土層で4～5cm厚に堆積する。その下に旧表土層とみられる2層が堆積し、その下に地山層が3層として堆積する。2層は炭化物と現代の遺物を含むことから、昭和22年に火災がおきた際の表土だったと想定する。3層直上に石列・石積みを確認された。長方形に土地を区画するもので、天養寺の建物の外面に沿った区画だと考えられる。特に寺の南西側は自然石を数段積み重ねるもので、石積になっている。

・ Gトレンチ (図6)

Fトレンチの北東の石列のつながりを確認する目的で設定したトレンチである。寺の建物を囲むように区画された石列と踏み上がりとみられる石段遺構が確認できた。この辺りに天養寺の入口があった可能性が考えられる。またトレンチからは外れるが、当トレンチの東側に石の階段が確認された。階段から踏み上がりに至る導線の存在が推測された。近代の陶磁器片が出土している。

・ Hトレンチ (図省略・写真のみ)

天養寺の建物があった場所から北西にやや離れた場所に設けたトレンチである。トレンチを設定した場所のすぐ北西に溝跡が確認できる。古い区画溝の可能性を考え、当地点に寺か館の遺構が確認できないかどうかを確認するために設定した。1層の腐食土層が5cmほど堆積し、その直下に地山層が確認できた。遺構、遺物は確認できなかった。

・ Iトレンチ (図省略・写真のみ)

寺の西南に並ぶ石積みの構造を確認するために設定したトレンチである。人頭大の自然石を4～5石積み上げたもので、1層の腐食土層を5cmほど掘り下げると明確な裏込め構造が検出できる。裏込めの上部からは近現代の陶磁器が出土する。

・ Jトレンチ (図6)

天養寺の建物があった領域の周辺には複数の溝が巡っているが、一部埋め立てられたように平坦になっている場所がある。この地点にトレンチを設定したところ、内部から焼けた土壁や陶磁器片など、火災の際に被熱したと見られる遺物がまとまって出土した。火災後に後片付けを行った際、周囲の溝に廃材などを埋めたものだと考えられる。遺物の内容から昭和22年の火災遺物であると考えられる。

・ Kトレンチ (図7)

FからJトレンチを設定した丘陵部上の平場の西端にある虎口状の地形周辺に設定したトレンチである。当地点には丘陵部へアクセスする古い通路の痕跡が見られる。虎口状の地形は平場とその通路の連結部に所在する。塀や柱、門扉の跡などの遺構の存在を考えて調査を実施したが、遺構は全く確認できなかった。しかし1層の腐食土層の下に炭化物を含む2層が堆積しており、そこから鉄釘、土器片が出土した。土器については小片で分類不可能である。また3層も炭化粒と焼土粒を含む層であり、染付と土器片が1点ずつ出土した。どちらも火災に関わる層だと想定するが、2層は黒色土粒を含むことから火災後に移動した土層、3層は被熱した地表の層であると推測できる。その下に地山層が確認できる。

2-5-3. 推定弁天堂周辺トレンチ (図8)

・ L、Mトレンチ (図9)

天養寺跡と観音堂を結ぶ裏道沿いの中間地点に、溝によって方形に区画した地形が見られる。堀の内部には、当地の周囲の自然堆積ではありえない大きな石が転がっており、規則的に並んでいることから建物の礎石の可能性が想定された。地元の古老によれば、この辺りに弁天様が祭られていた場所があったらしく、この溝で区画された内部に弁財天のお堂があった可能性も考えられた。

このようなことを確認するために方形の区画内に十字のトレンチを設定した。南北方向をL、東西方向をMトレンチとする。1層は表土層。その直下に地山に相当する2層が確認できた。規則的に配置されているようにみえた4つの石については、石の下に表土層が入り込んでいることが確認できたことから、元位置を維持しているものではないことがわかった。また十字トレンチの中央部付近から寛永通宝が出土しており、当地が近世の古銭の賽銭を伴う拝礼場所である可能性が高まった。

2-5-4. 石仏集中地点トレンチ (図10)

・ Nトレンチ (図10)

観音堂裏手の山中の中腹に石仏を並べた平場がある。その一角に石材を方形に組み合わせた遺構が確認できていたことから、この周辺にトレンチを設定した。周囲の石仏群については2016年に踏査を実施しており、楠千栄美による論考がある。1層は表土、2層は傾斜部から崩れてきた地山の再堆積層だと想定する。3層が地山である。結果として当遺構は、地山を方形に掘り込み、その中に石を並べた石枠であることがわかった。枠の内部に底石はなく、遺物も出土しなかった。目的は不明であるが規模としては石仏の基礎に丁度良く、石仏を設置するために設けた石列の可能性も考えられた。

・ Oトレンチ (図10)

設置されている石仏の下部の土層を確認するために設定したトレンチである。土の堆積はMトレンチと同様である。石仏は地山直上に設置されていることが分かった。

2-6. 炭素年代測定の結果 (表2・3)

当遺跡の年代測定を実施するためAトレンチから木質を採取し、山形大学 (YU-MSYグループ) に試料の年代測定を依頼した。2 σ 暦年代範囲で1492AD~1643AD、1470AD~1635AD、1447AD~1625AD、1667AD~1949ADというような測定結果で、やや乱れはあるものの観音堂周辺から採取した木質から中世の数値を得ることができた。試料の一覧を表2に、その結果を表3に提示した。

2-7. 調査結果

当地は天養寺館跡という中世の館、また天養寺という寺院の寺域だった場所である。地表面に古い溝跡や石列・石段などの遺構がみられることから、分布調査によって当地の埋蔵文化財の分布状況を確認した。今回の調査では中世の遺構は全く確認することができなかった。当地には天養寺館が所在するとされているが、この点についても確証を得ることはできなかった。唯一中世の年代を得ることができたのは、観音堂周辺の木質に対する炭素年代測定の結果だった。

対して石畳、石段、石列など、かつての天養寺の寺域を構成する遺構が多数確認された。こういった遺構の周辺からは陶磁器片が出土するが、もっとも古くて近世、ほとんどが近現代を中心とするもので、昭和22年までであった天養寺関係の遺物、もしくは昭和58年に実施された天養寺観音堂の保存修理事業の際の廃棄ごみとみられる遺物が主体であった。ただし遺構群についてはセットで年号が刻まれた石碑が配置されていることから近世の所産であることが推定された。観音堂の東側に全高1m弱の石が3つ倒れていたが、これを裏返したところ、全て石碑であることが分かった。年号も近世のもので、やはり近世を中心とした寺域が当地に広く分布していることが分かった。

参考文献

- 長岡勇「中村観音由来」(『いいで史話』創刊号、飯豊町文化財研究会、1965年11月)
長岡勇「中村観音由来(二)」(『いいで史話』第二号、飯豊町文化財研究会、1966年3月)
長岡勇「自然と建造物」(『いいで史話』第四号、飯豊町文化財研究会、1967年3月)
井上俊雄「飯豊町の中世史」『町史の窓<中間報告>①』(飯豊町史編さん委員会、1982年2月)
井上俊雄『天養寺観音堂 山形県指定有形文化財保存修理報告書』(飯豊町教育委員会・中村観音堂保存会、1983年4月)
飯豊町教育委員会「中世郷土の文化財」『飯豊町史 上巻』(飯豊町、1986年3月)
飯豊町教育委員会「第4章第4節飯豊の地頭領主」『飯豊町史 上巻』(飯豊町、1986年3月)
飯豊町教育委員会『飯豊町の歴史漫歩』(飯豊町教育委員会、1988年3月)
飯豊町教育委員会『飯豊町の文化財』(飯豊町教育委員会、1989年1月)
山形県教育委員会『山形県中世城館遺跡調査報告書 第1集(置賜地域)』(山形県教育委員会、1995年3月)
大谷部秀二「ホトケヤマ思考」(『飯豊史話』第25号、飯豊史話会、1997年8月)
大谷部秀二「(一) 飯豊町大字中の今と昔」(『飯豊史話』第28号、飯豊史話会、2000年8月)
大谷部秀二「(二) 飯豊町大字中の今と昔」(『飯豊史話』第30号、飯豊史話会、2002年8月)
渡部新次「天養寺観音堂」(『飯豊史話』第32号、飯豊史話会、2004年3月)
長岡實「天養寺観音堂(中)」『飯豊町宝物百選 飯豊町町制施行五十周年記念』(飯豊史話会、2008年3月)
長岡實「中村観音の聖観音像」『飯豊町宝物百選 飯豊町町制施行五十周年記念』(飯豊史話会、2008年3月)
伊藤幸雄「天養寺絵馬」『飯豊町宝物百選 飯豊町町制施行五十周年記念』(飯豊史話会、2008年3月)
伊藤幸雄「絵馬神人曳馬図」『飯豊町宝物百選 飯豊町町制施行五十周年記念』(飯豊史話会、2008年3月)
中区協議会『中村史でっぽっぽ』(中区協議会、2009年12月)
三上喜孝「飯豊町・天養寺観音堂の落書きが語るもの」(『歴史と考古』第九号、2012年6月)
菅野正道「伊達家の家臣たち[萩生国分氏を中心として]」(『歴史と考古』第十号、2013年6月)
保角里志「置賜地方の城」(『歴史と考古』第五号、2007年6月)
楠千栄美「飯豊町 天養寺観音堂に祀られている石仏郡の調査と考察」(『さあべい』第31号、2016年5月)

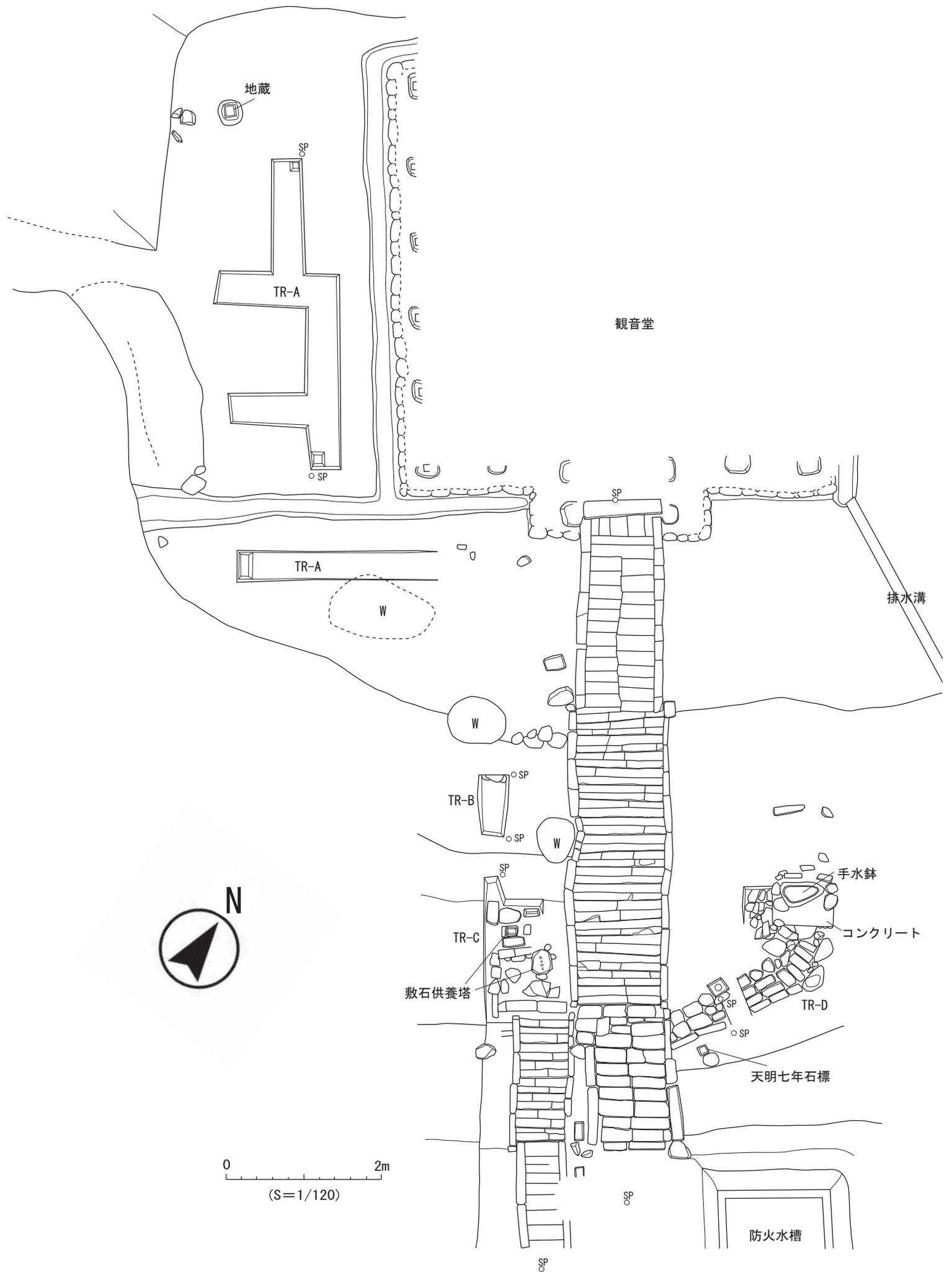


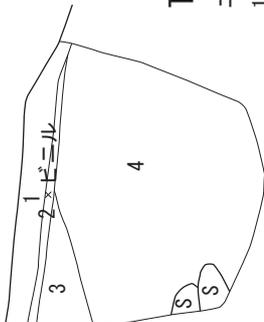
図2 観音堂と観音堂の階段周辺に設定したトレンチ配置図

TR-A 注記

土色 土質 しまり
1. 10YR2/1 土 なし 腐植土。

NE - - SW

TR-B

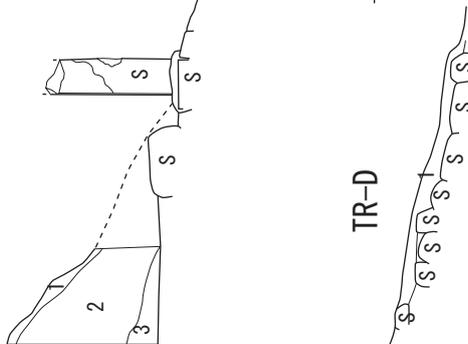


TR-B 注記

土色 土質 しまり
 1. 10YR2/1 土 なし 腐植土。
 2. 10YR4/3 土 なし 砂粒が多量混じる。ビニル・瓶破片を含む。
 3. 10YR2/1 土 なし かつての腐食土層カ。
 4. 10YR4/4 土 なし 直径1cm大の礫を含む。下部に大径の礫を設置。
 地山由来土であるが比較的新しい時代の盛土だと判断される。

NE - -

TR-C



TR-D

W - - E

- SW

TR-D 注記

土色 土質 しまり
1. 10YR2/1 土 なし 腐植土。

TR-C 注記

土色 土質 しまり
 1. 10YR2/1 土 なし 腐食土。
 2. 10YR4/4 粘土 あり 10YR2/1土粒含む。
 3. 10YR5/6 土 あり 直径1~5cm大の礫を含む。崩落土カ。

階段エレベーション断面図

NE - -

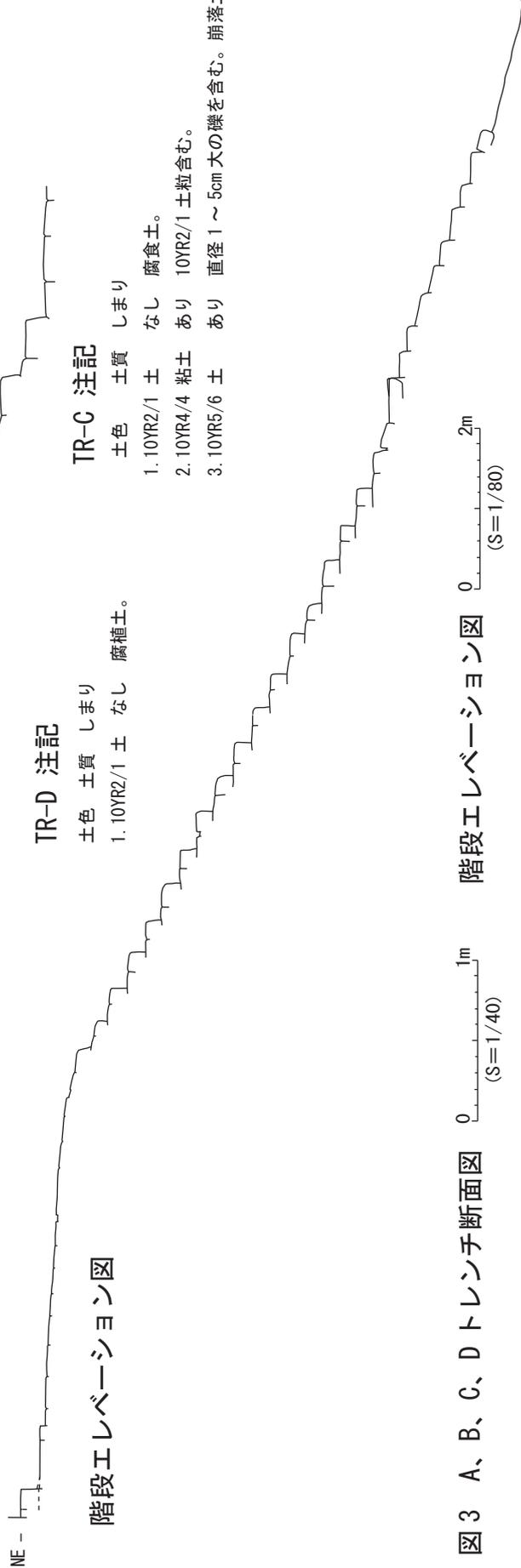


図3 A、B、C、Dトレンチ断面図

階段エレベーション断面図 (S=1/40)

(S=1/80)

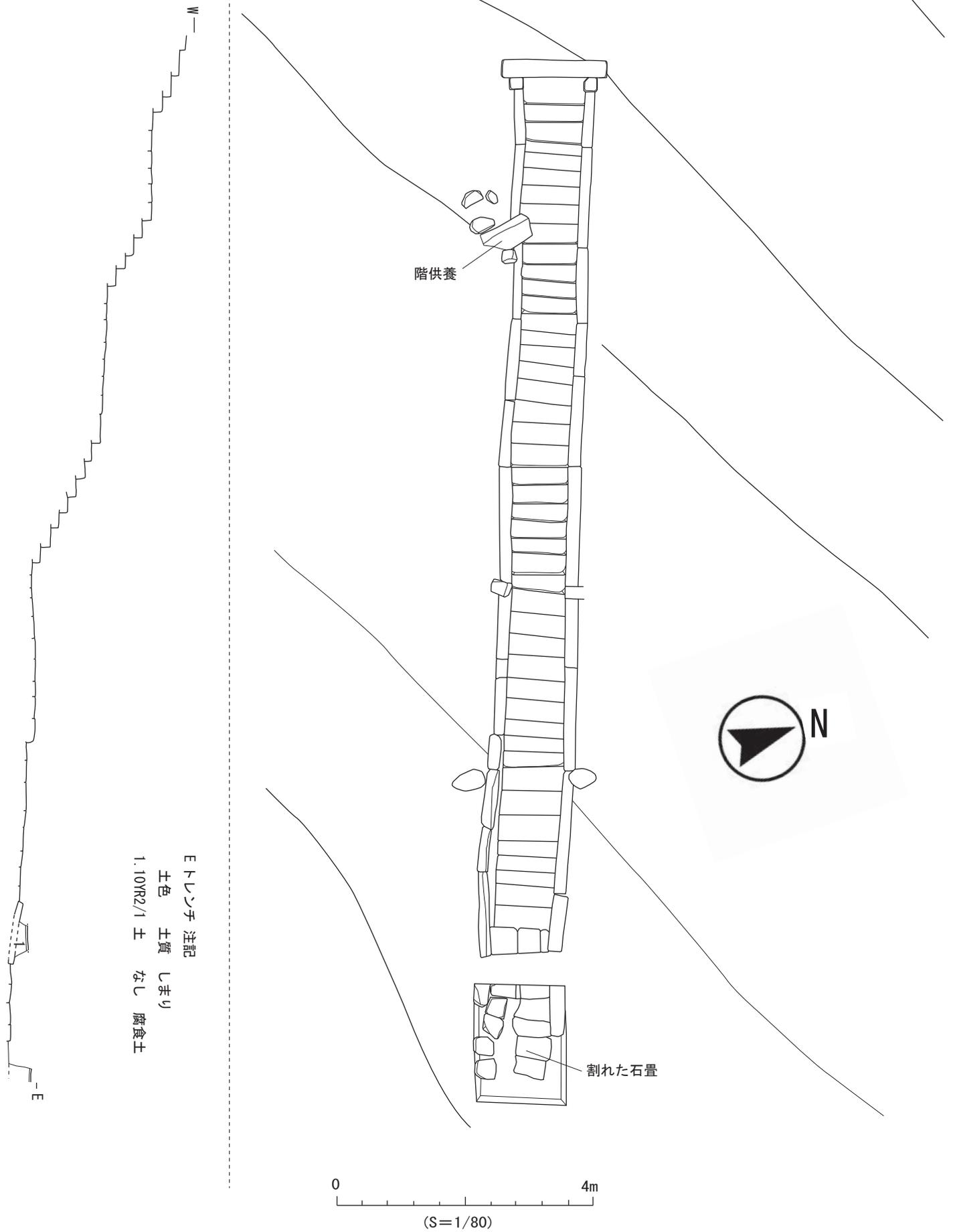


図4 Eトレンチ平面図・断面図・階段エレベーション図

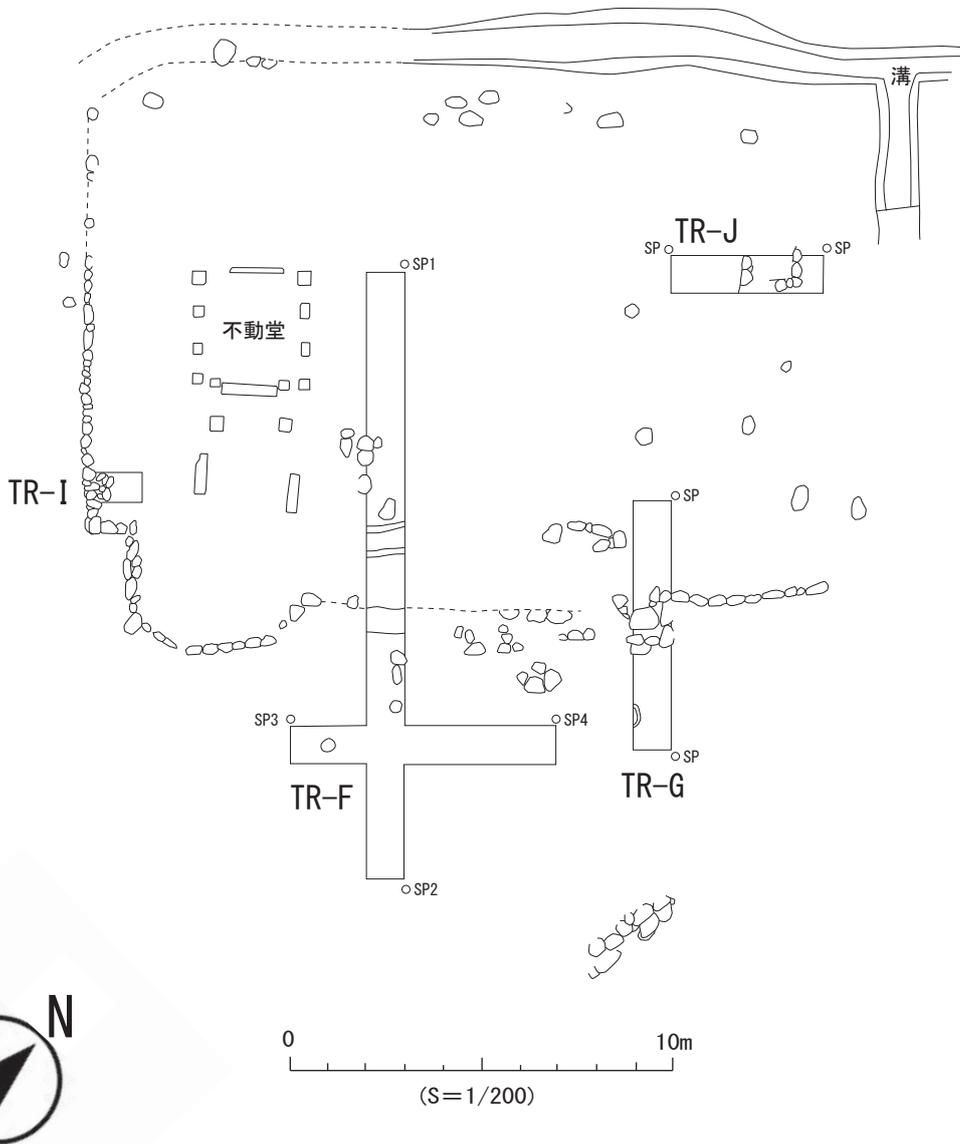
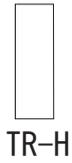
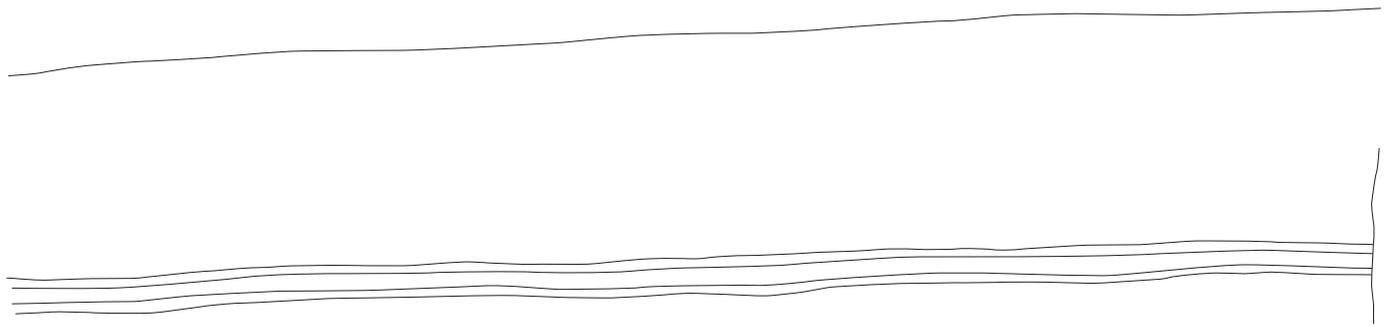
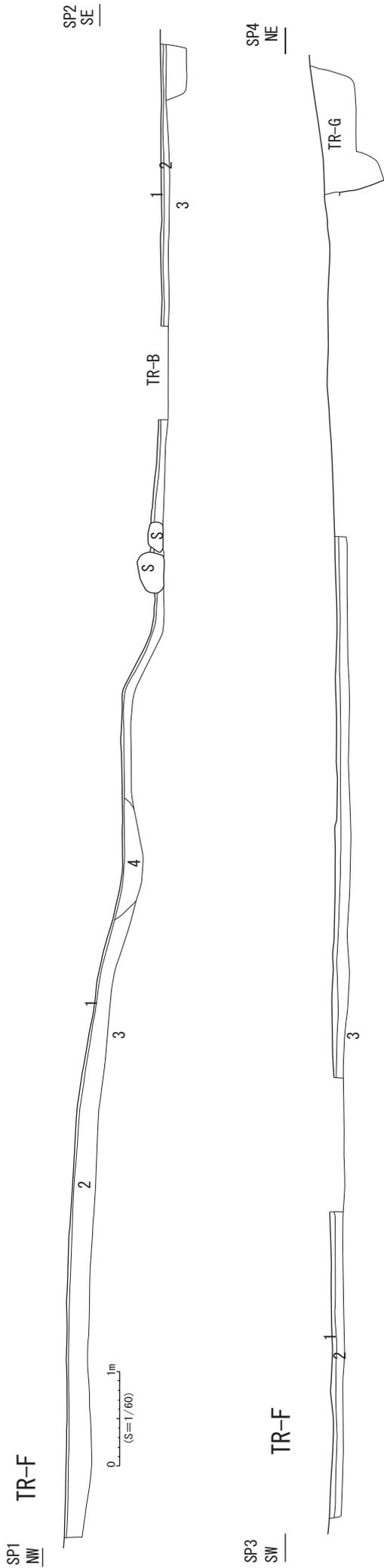


図5 不動堂・天養寺跡周辺トレンチ配置図

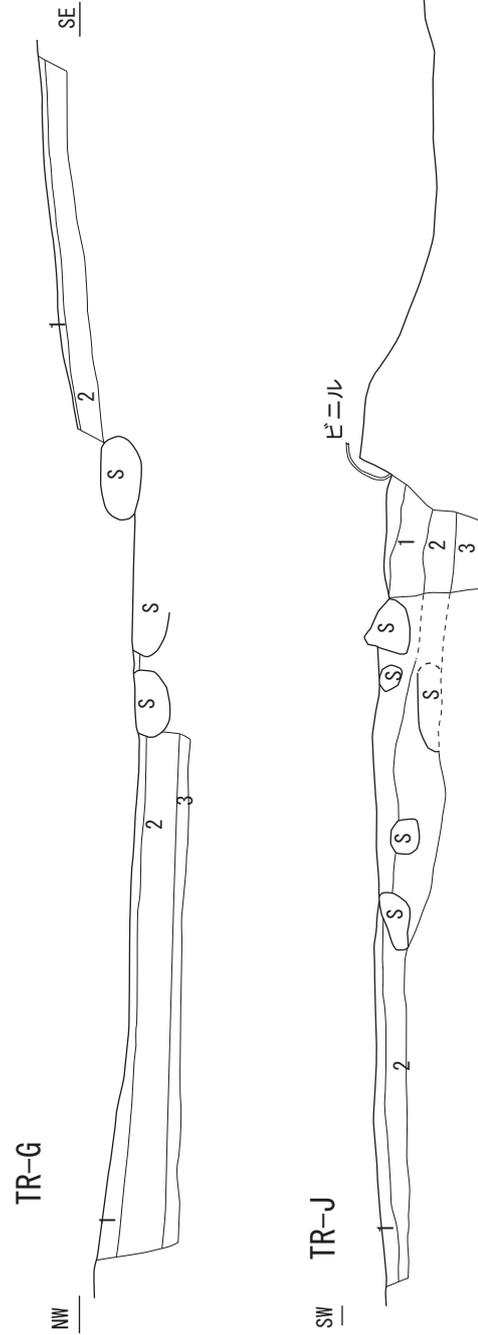


TR-K (図7)



TR-F、G 注記

- | 土色 | 土質 | しまり |
|------------|----|-----|
| 1. 10YR2/2 | 土 | なし |
| 2. 10YR3/2 | 土 | あり |
| 3. 10YR5/6 | 土 | あり |
| 4. 10YR2/1 | 土 | あり |
- 腐食土層。
炭化物・炭化粒含む。
10YR5/6 土粒含む。
地山。
炭化物・炭化粒を多量含む。
焼けた土壁とみられる焼土含む。
10YR5/6 土ブロックを含む。



TR-J 注記

- | 土色 | 土質 | しまり |
|------------|----|-----|
| 1. 10YR2/1 | 土 | なし |
| 2. 10YR3/3 | 土 | あり |
| 3. 10YR6/6 | 粘土 | あり |
| 4. - | 木 | なし |
- 腐食土。
炭化物。焼土片・遺物を含む。礫含む。
均質。
松。松くい虫の被害木をビニルで覆ったもの。

図 6 F、G、J トレンチ断面図

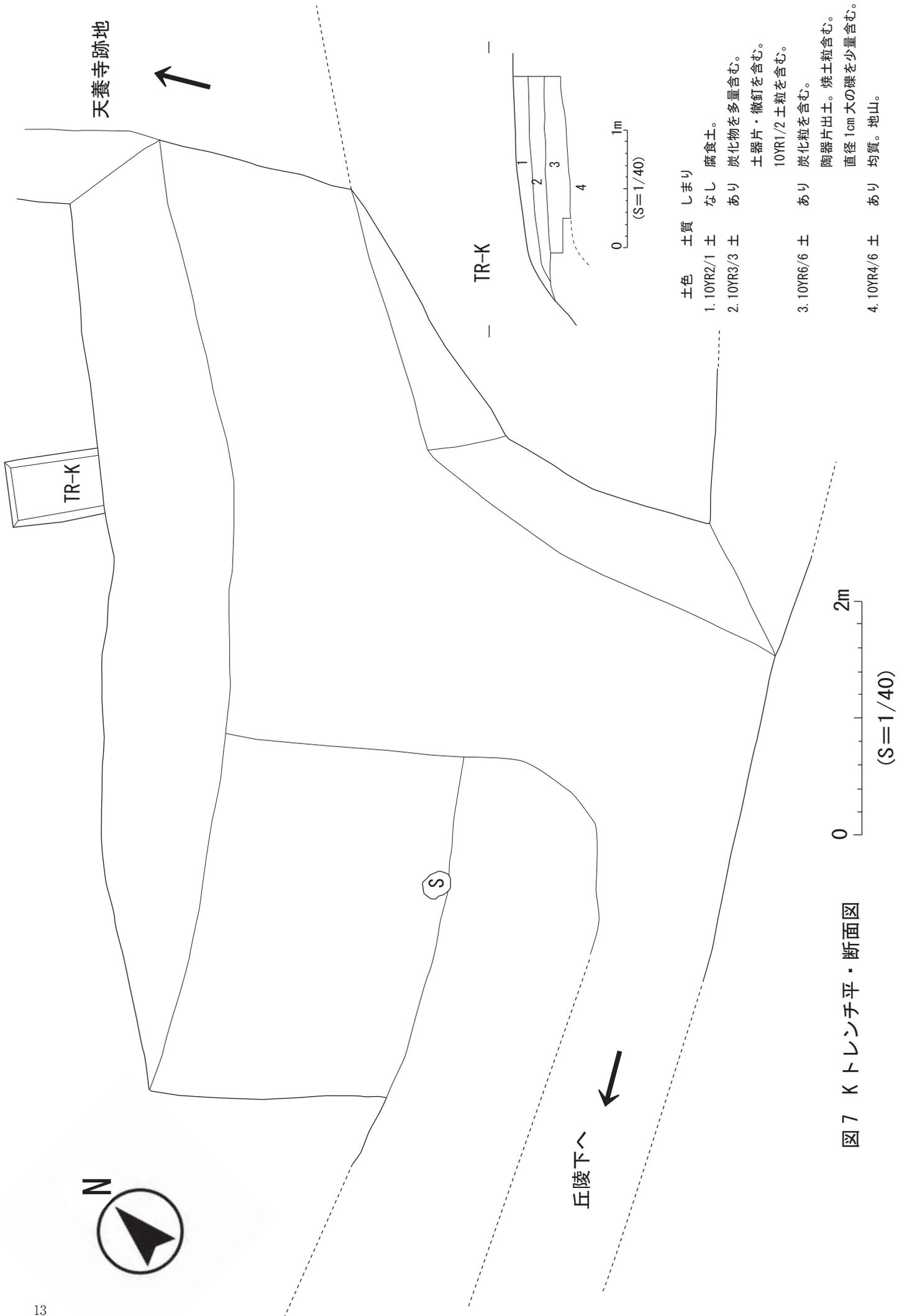
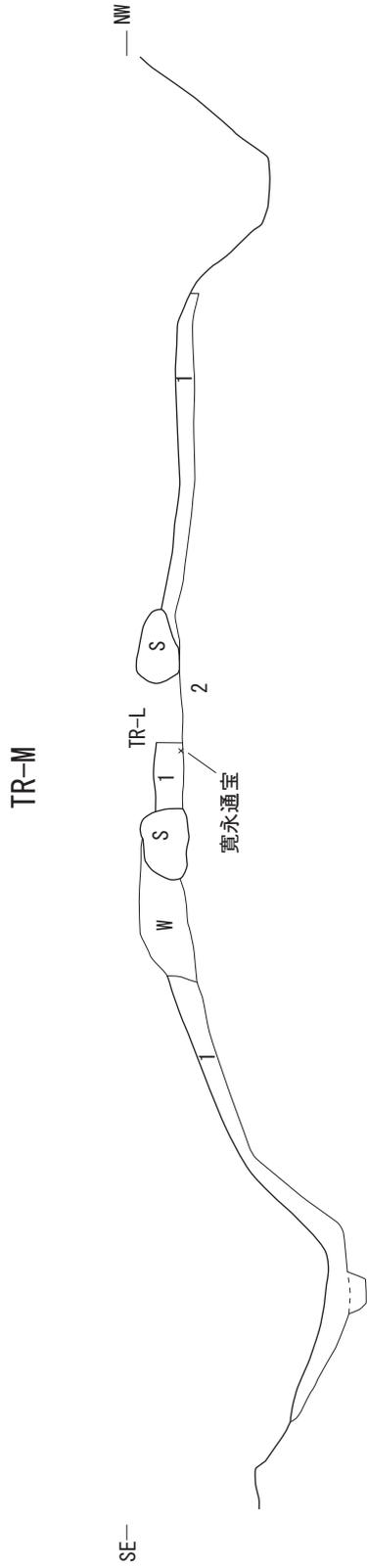


図7 Kトレンチ平・断面図



- | 土色 | 土質 | しまり |
|------------|----|-----|
| 1. 10YR2/1 | 土 | なし |
| 2. 10YR4/6 | 土 | あり |
| 3. 10YR4/3 | 粘土 | なし |
- 腐植土。
地山。
掘底に堆積した粘土。

TR-L

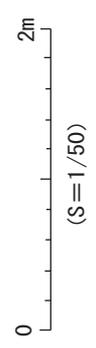
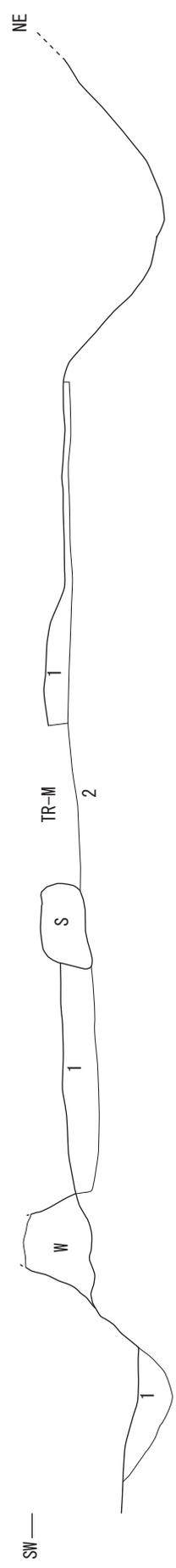


図9 推定弁天堂周辺トレンチ断面図

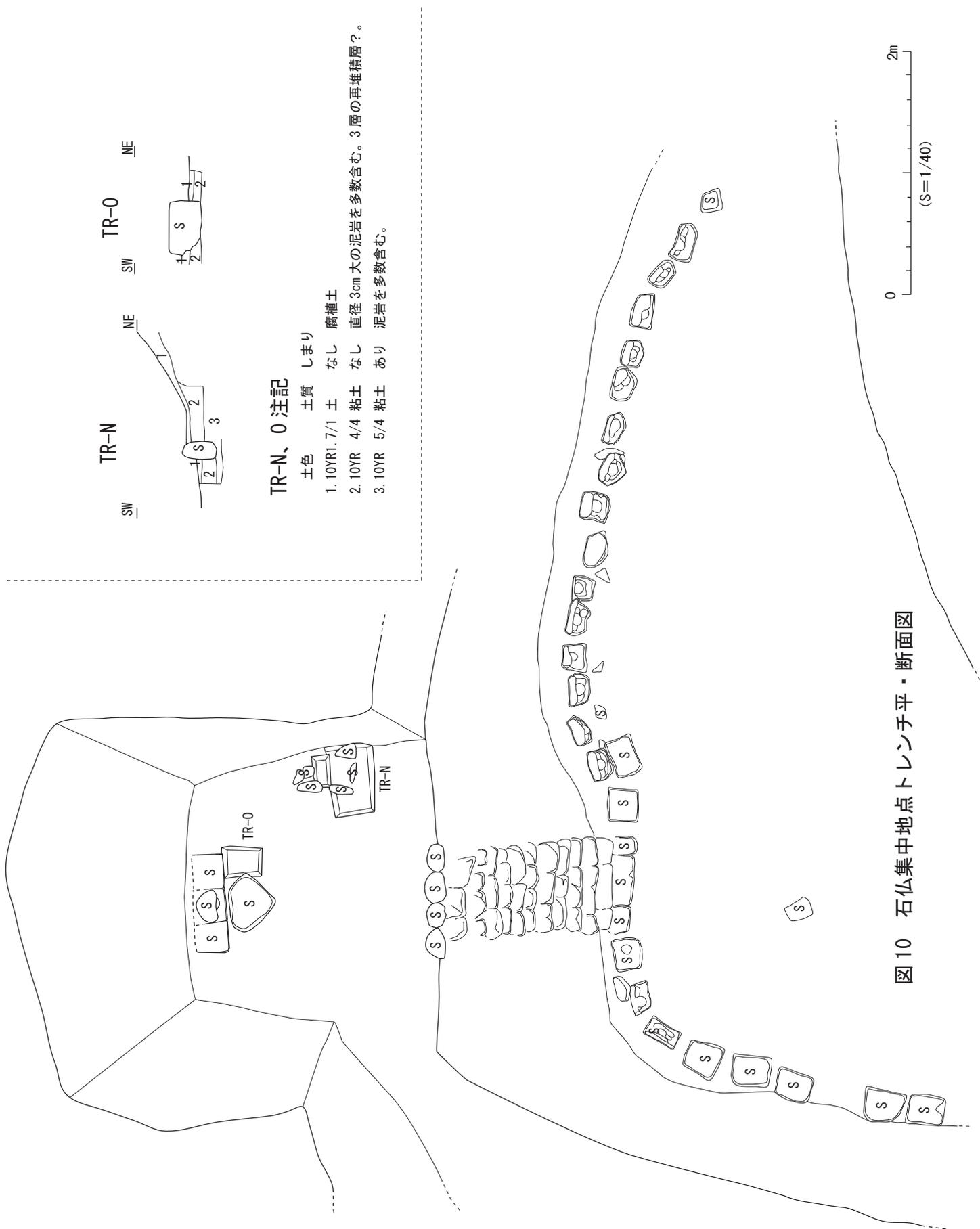


図 10 石仏集中地点トレンチ平・断面図

0 2m
(S=1/40)

ラボコード	測定試料名	試料情報	試料状態	処理
YU-6991	TYJ-1	木片サンプル 天養寺-1	2544mgをグラファイト化 に使用	AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 0.1M NaOH 80 度 1 時間 (2 回) 1M HCl 80 度 1 時間
YU-6992	TYJ-2	木片サンプル 天養寺-2	2831mgをグラファイト化 に使用	AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 0.1M NaOH 80 度 1 時間 (2 回) 1M HCl 80 度 1 時間
YU-6993	TYJ-3	木片サンプル 天養寺-3	2481mgをグラファイト化 に使用	AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 0.1M NaOH 80 度 1 時間 (2 回) 1M HCl 80 度 1 時間
YU-6994	TYJ-4	木片サンプル 天養寺-4	2719mgをグラファイト化 に使用	AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 0.1M NaOH 80 度 1 時間 (2 回) 1M HCl 80 度 1 時間

表2 天養寺周辺 炭素年代測定資料の一覧

測定番号	試料名	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
YU-6991	TYJ-1	-25.45 \pm 0.37	321 \pm 20	320 \pm 20	1521AD (8.0%) 1531AC 1538AD (60.2%) 1592AD 1620AD (13.4%) 1636AD	1492AD (75.8%) 1603AD 1614AD (19.6%) 1643AD
YU-6992	TYJ-2	-25.63 \pm 0.38	343 \pm 20	345 \pm 20	1490AD (25.8%) 1523AD 1559AD (2.3%) 1563AD 1571AD (24.8%) 1603AD 1610AD (15.4%) 1631AD	1470AD (36.2%) 1530AD 1540AD (59.2%) 1635AD
YU-6993	TYJ-3	-22.81 \pm 0.50	378 \pm 22	380 \pm 20	1454AD (52.1%) 1495AD 1602AD (16.1%) 1616AD	1447AD (68.3%) 1522AD 1575AD (27.1%) 1625AD
YU-6994	TYJ-4	-25.87 \pm 0.34	149 \pm 20	150 \pm 20	1677AD (11.3%) 1693AD 1728AD (29.4%) 1765AD 1773AD (2.3%) 1777AD 1800AD (9.0%) 1812AD 1919AD (16.2%) 1940AD	1667AD (15.6%) 1700AD 1720AD (36.2%) 1783AD 1796AD (11.2%) 1819AD 1832AD (18.4%) 1949AD

表3 天養寺周辺 炭素年代測定の結果

3. 手ノ子区 西館周辺の分布調査

3-1. 調査の経緯

平成28年度は当区における埋蔵文化財の実状把握を目指し、宇津峠沿いに分布調査を実施した。今年度は落合峠沿いにある手ノ子西館周辺において同様の分布調査を実施する。

また平成27～28年度に飯豊町内の萩生区において実施した分布調査によって、手ノ子西館と同じ時期の中世城館である萩生城の遺構を確認した。類似性のある遺跡の分布状況を実施することで、相互の有効な状況把握になることが予想されたことから積極的にこの地を選択し、踏査・試掘による埋蔵文化財の分布調査を実施し、当地の埋蔵文化財の実状の把握を目指した。



図11 飯豊西部遺跡地図

3-2. 遺跡の環境

手ノ子地区一帯は白川の谷口部に位置し、近世には手ノ子村、中世には手ノ子郷と呼ばれる越後-米沢街道の要地であった。近世以後は宿場町として栄え、大正期頃の地図を見ると多くの宿があったことが分かる。

手ノ子西館は白川左岸にあるJR米坂線手ノ子駅の南西約100mの地点に所在する。虚空蔵山という丘陵の自然地形を利用した山城である。現在も館の西側には南北方向に底幅1.5m、長さ100mに及ぶ長大な空堀が見られる。また郭だと考えられている山頂平場の東西には、約2.6m幅の土塁と思しき地形がみられる。周囲は急斜面で「沢の入」や「ガン沢」といった白川の支流が外堀の役割を果たす戦闘用の詰城だといわれている。対してガン沢の出口付近にある手ノ子の旧八幡神社、稲荷神社、郷倉の跡地に南館と呼ばれる地域があり、そちらは平時の居館があった場所だと考えられている。西館を中心にこれを囲んで家臣団の集落が形成される根小屋式の城郭であったと推測されている。

遺跡番号	遺跡名	年代
403-032	長者原遺跡	縄文時代
403-041	才先林遺跡	縄文前期
403-049	手ノ子南館	
403-057	館ノ越	
403-059	町屋敷	
403-060	手ノ子西館	

表4 飯豊西部遺跡一覧

3-3. 歴史的環境

西館と南館は伊達家の家臣だった遠藤四郎左衛門の城だと伝わる。遠藤家代々の当主が四郎左衛門を名乗っており、手ノ子だけではなく、同町の小白川・西高峰在家、現在の小国町にあたる市野々在家・叶水在家・箱の口在家、さらに樺・朴ノ沢の数集落を領した有力領主で、越後街道の惣成敗権を安堵された重要な家臣だった。天正19年（1591）、伊達政宗が豊臣秀吉の命で宮城に移ると、遠藤家も一族で宮城に移ったとみられ、その後、手ノ子に遠藤四郎左衛門の一族は確認できなくなる。井上俊雄氏の論考によれば遠藤四郎左衛門に関する史料の初見が大永頃であることを根拠に、大永元年（1521）～天正2年（1591）までの70年間、2～3代にわたって手ノ子に在住したと推測している。また当

地に所在する源居寺には、かつて「源居寺殿悟本龍大居士位 永禄元戊辰年（1558）四月一日」と記された位牌があったという。これが遠藤四郎左衛門の位牌だと伝わっている。

江戸時代の初め、小国町白子沢では遠藤三郎左衛門という家が問屋を務めており、この家は四郎左衛門家の親戚だったともいわれている。また同時期の手ノ子では肝煎と問屋を湯村太左衛門家が勤めた。湯村家は遠藤家に従う有力な豪族だった可能性が高く、一説によれば福島県飯坂から手ノ子に入植したとも考えられている。宮城に移った遠藤家になり、有力者だった湯村家が次第に手ノ子の政治を担っていったのかもしれない。西館の南東部には、明治期になると手ノ子小学校が建設される。さらに昭和3年頃には米坂線が通り、その際山の裾部分が大分掘削された。戦時中には郭部が食料増産を目的に豆畑や大根畑として開墾され、この際土塁の一部などが破壊されと考えられる。

3-4. 調査の経過

2017年5月16日 現地踏査

2017年9月22日 現地踏査

2017年9月27日～28日 トレンチ調査

2017年10月2日～6日 トレンチ調査

2017年10月17日～18日 各所実測作業、写真記録

2017年11月14日～18日 埋戻し、安全確保作業

2017年12月～2018年3月 報告書作成

3-5. 手の子地区におけるトレンチ調査の結果

3-5-1. 西館周辺のトレンチ調査（図12）

当地は中世の山城があったと伝わる地点で現在も土塁や空堀と見られる遺構が残る。中世の痕跡を確認するため土塁と推定されている場所を中心に3本のトレンチを設定し、調査を実施した。

・トレンチ1（図12・13）

トレンチ1は虚空蔵山の上の平場の東側に所在する、土塁と推定されている場所から東西方向に約760cmの長さで設置した。幅約150cmである。1層に落葉や雑草に由来する腐食土が堆積する。2層は混ざり土でしまりが弱い状況から畑土だと推定する。平場部分では2層直下に地山が確認できる。これは9～11層に相当する。地山の上面でピットP1～9、土坑SK1、溝SD1～2を検出した。半裁したところ、全てのピットに柱痕、もしくは柱の抜取痕が確認できた。また遺構内部からは炭化物が出土した。SK1は遺構の平面形状が不整形である。SD1とSD2は溝だと判断したが、遺構の一部を確認しただけであり、楕円形の土坑の可能性も考えられる。

土塁部分については5～7層にブロック状の混ざり土が堆積することから、人為的な盛土層であることが推定された。最下層にあたる7層の下に多量の焼土と炭化物を含む粘土層、8層が薄く堆積している。土塁を構成している盛土層と地山との上下関係と有機物を由来とするような暗褐色の土色から、この層は土塁構築以前の生活面だと推測した。遺構からは人為的な普請・作事痕と考えられる痕跡を確認することができたが、確実な遺物は1点も出土しなかった。唯一、8-②層の表面から朱色の漆の皮膜を検出した。しかし木質は残存していなかったため時代を推定する遺物とはならなかった。よってSK1・SD1・SP5・土塁下の8層の4ヶ所から出土した炭化物を1点ずつ試料とし、

炭素年代測定を山形大学（YU-MSYグループ）に依頼した。

・トレンチ2（図13）

トレンチ2は虚空蔵山の上の平場の西側に所在する土塁と推定される場所から東西方向に幅約150cm、長さ約740cmで設置した。1層に落葉や雑草に由来する腐食土が、2層に畑土と推測されるしまりが弱い混ざり土が堆積する。やはり平場部分では2層直下に地山が確認できる。地山は9～11層である。地山上面でピットP1～3を検出した。ただし半裁したところトレンチ1のピットのような明確な柱痕は確認できなかった。覆土の色や質もトレンチ1とは異なり、近現代の畑耕作に伴う遺構である可能性が高い。

土塁部分については5～8層にブロック状の混ざり土が堆積することから、人為的な盛土層であることが推定された。また盛土の最下層にあたる8層の下に多量の焼土と炭化物を含む粘土層である3層が薄く堆積する。トレンチ1同様にこの層は土塁造作以前の生活面だと推測できた。

・トレンチ3（図13）

トレンチ3はトレンチ1の南側に東西方向に幅約150cm、長さ約200cmで設定した。1層の腐食土、2層の畑土はトレンチ1、2と同様である。他のトレンチとは異なり、畑土の下に炭化物や砂礫を含む3～4層が堆積する。層位的に土塁を構成する盛土層5、8層の上に堆積することから、山城が普請した後の堆積層だと判断する。7層が地山層である。6層を土塁普請以前の生活面だと推測した。10層は土坑状の遺構である。炭化物や焼土が少量出土する。

3-6. 炭素年代測定の結果（表5・6）

柱の抜取痕が確認できたSP5から採取した炭化物からは2 σ 暦年代範囲で1466AD-1635ADの数値、土塁盛土の下の推定旧表土層8-①層から採取した炭化物からは1478AD-1636ADの数値が出た。SK1とSD1からは254AD-390AD、89AD-235ADの数値が出た。試料の一覧を表5に、その結果を表6に提示する。

3-7. 手ノ子地区西館周辺の調査結果

まず土塁だと考えられてきた地形が人為的な盛土であり、土塁である可能性が高いことを確認した。そして土塁盛土の下の旧表土層8-①層から採取した炭化物からは2 σ 暦年代範囲で1478AD-1636ADを示すデータが出た。つまりこの時期以降に土塁が構築されたことになる。また平場において検出されたSP5から採取した炭化物は1466AD-1635ADの試料であることが分かった。

分析結果としては近世の早い段階も含まれているが、井上俊雄氏の推測による、手ノ子における遠藤四郎左衛門家の在住期間である大永元年（1521）～天正2年（1591）、また伝えられる遠藤四郎左衛門の位牌に記された年号、永禄元年（1558）といった史料のデータを重ねて検討すれば、炭素年代のデータを古い時期に引き寄せて考えることができるのではないだろうか。つまり当地に中世城館があった可能性を高めるデータだと見ることができる。

一方、トレンチ1内で検出された溝や土坑から採取した炭からは254AD-390AD、89AD-235ADの数値が出た。今回の調査によって遺物はまったく出土しなかったことから、可能性は低いですが、周囲に弥生時代から古墳時代の生活の痕跡を残す遺跡が包蔵していることも考えられる。

参考文献

- 安部隆吉「手ノ子城主と伊達の重臣（遠藤山城守藤原基信の関係）」（『いいで史話』第5号、1967年10月）
- 井上俊雄「表紙写真解説 鶯絵図と遠藤四郎左エ門」（『いいで史話』第6号、1968年10月）
- 川西町史編さん委員会「川西の城と館」『川西町史 上巻』（川西町、1979年11月）
- 佐藤惣二「遠藤四郎左エ門について」『町史の窓〈中間報告〉①』（飯豊町町史編さん委員会、1982年2月）
- 井上俊雄「飯豊町の中世史」『町史の窓〈中間報告〉①』（飯豊町史編さん委員会、1982年2月）
- 教育委員会「第4章第4節飯豊の地頭領主」『飯豊町史 上巻』（飯豊町、1986年3月）
- 飯豊町教育委員会「第4章第5節飯豊の中世文化」『飯豊町史 上巻』（飯豊町、1986年3月）
- 飯豊町教育委員会「中世郷土の文化財」『飯豊町史 上巻』（飯豊町、1986年3月）
- 飯豊町教育委員会『飯豊町の歴史漫歩』（飯豊町教育委員会、1988年3月）
- 山形県教育委員会『山形県中世城館遺跡調査報告書 第1集（置賜地域）』（山形県教育委員会、1995年3月）
- 井上俊雄「越後道を開いた伊達氏」『置賜の歴史』（郷土出版社、2001年7月）
- 井上俊雄「お鷹献上と地頭たち」『置賜の歴史』（郷土出版社、2001年7月）
- 保角里志「置賜地方の城」（『歴史と考古』第5号、2007年6月）
- 高橋運作「宇津峠と「手ノ子」の宿場」（『飯豊史話』33号、2008年3月）
- 安部俊治「戦国期伊達領長井（置賜郡）と越後への通路と手ノ子館について」（『歴史と考古』第6号、2008年6月）
- 大富國雄「飯豊町の「館」に関する考察（その二）」（『飯豊史話』37号、2009年3月）
- 安部俊治「十六世紀後期長井・越後間の交通路と市城主」（『年俸都市研究』17遊郭社会、2010年2月）
- 井上俊雄「戦国手ノ子遠藤氏の城館遺跡について」（『さあべい』第27号2011年8月）
- 菅野正道「伊達家の家臣たち [萩生国分氏を中心として]」（『歴史と考古』第10号、2013年6月）
- 高橋純『宇津峠歩こう会 宇津峠の史跡一蘇る古道の息吹一』（宇津峠部会、2018年）

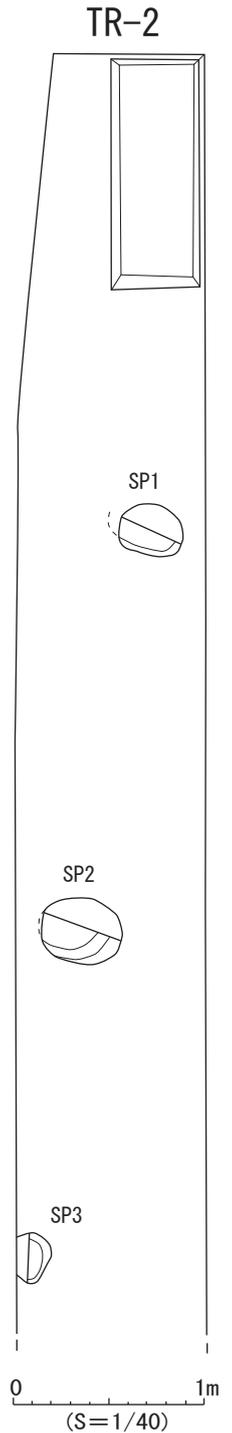
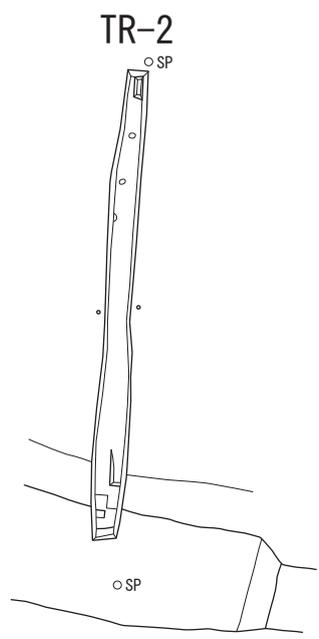
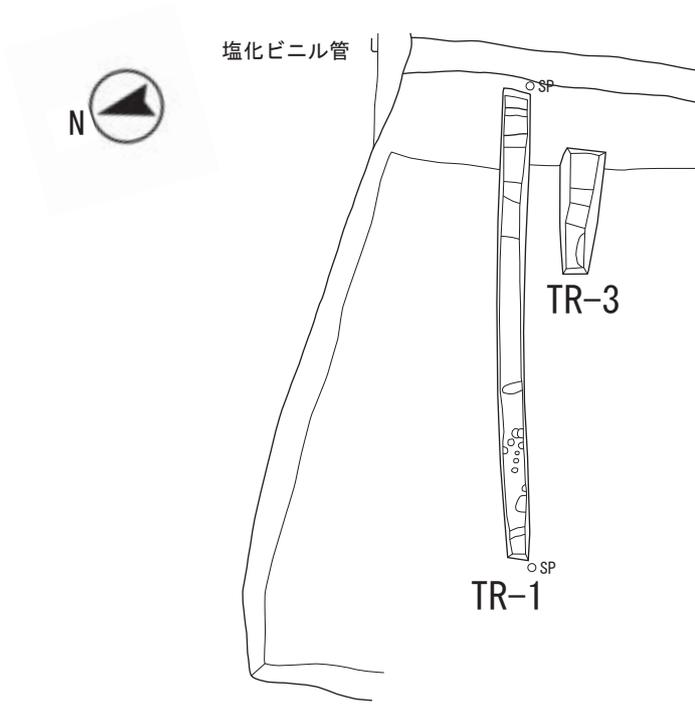
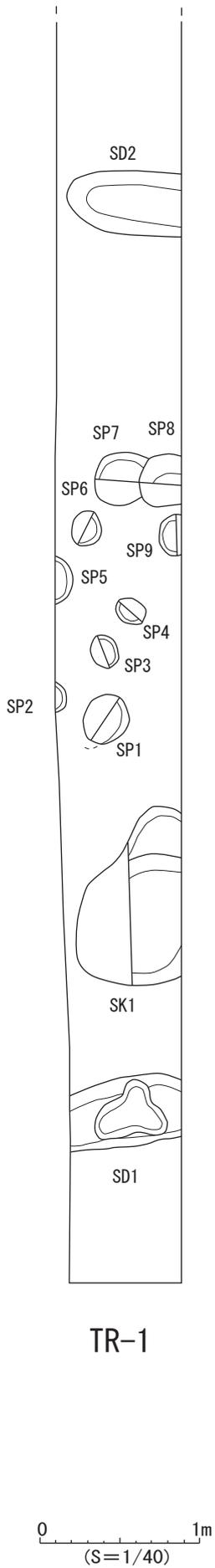
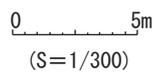


図 12 手ノ子西館周辺平面図



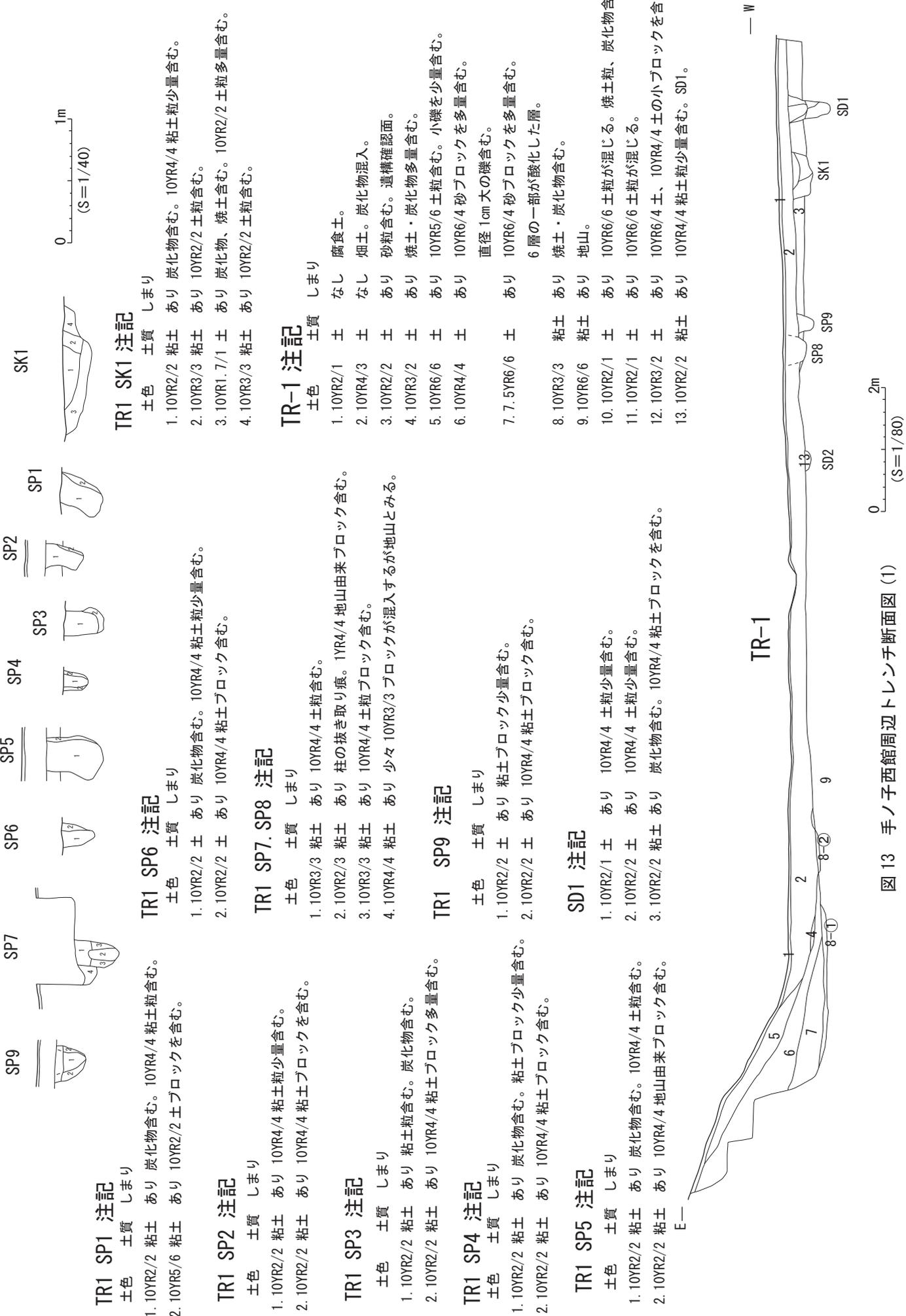
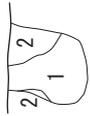


図 13 手ノ子西館周辺トレンチ断面図 (1)

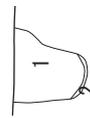
TR-2-SP1



TR-2-SP1 注記

- 土色 しまり 土質 しまり
- 10YR3/3 粘土 あり 炭化物含む。
 - 10YR5/4 粘土 あり 地山。
 - 10YR3/3 土 なし 焼土含む。

TR-2-SP2



TR-2-SP2 注記

- 土色 しまり 土質 しまり
- 10YR4/3 粘土 あり 推定地山由来の 10YR5/6 粘土ブロックを少量含む。
 - 10YR3/3 粘土 あり 推定地山由来の 10YR5/6 粘土ブロックを多量含む。

TR-2-SP3



TR-2-SP3 注記

- 土色 しまり 土質 しまり
- 10YR4/3 粘土 あり 推定地山由来の 10YR5/6 粘土ブロックを少量含む。
 - 10YR3/3 粘土 あり 推定地山由来の 10YR5/6 粘土ブロックを多量含む。

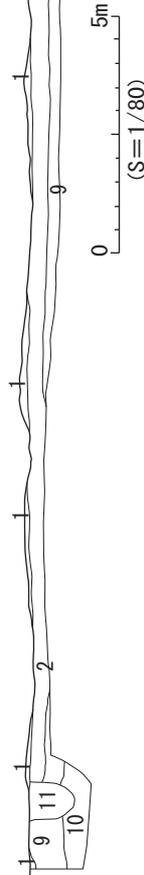
TR-2 注記

- 土色 しまり 土質 しまり
- 10YR2/1 土 なし 腐食土。
 - 10YR3/3 土 なし 炭化物含む。推定地山由来土含む。畑土。
 - 10YR4/2 粘土 あり 炭化物・焼土含む。直径 3cm 大の礫を少量含む。
 - 10YR2/1 土 なし 炭化物・焼土粒多量含む。
 - 10YR4/2 粘土 あり 1cm 大の礫を含む。地山粒多量含む。
 - 10YR5/6 砂 なし 推定地山由来砂を含む。直径 1 ~ 3cm 大の礫を含む。
 - 礫 なし 直径 1 ~ 20cm 大の礫層。礫間に 10YR5/5 砂を含む。
 - 10YR4/4 土 あり 10YR6/4 砂ブロックを含む。直径 3cm 大の礫を含む。
 - 10YR4/4 粘土 あり 地山。
 - 10YR6/4 砂 あり 地山。
 - 10YR3/3 土 なし 炭化物含む。畑耕作の掘り込み。

E-

TR-2

-W



TR-3 注記

- 土色 しまり 土質 しまり
- 10YR2/1 土 なし 腐食土。
 - 10YR3/3 土 なし 畑土。炭化物含む。
 - 10YR3/3 土 あり 炭化物含む。10YR4/3 土粒、直径 1cm 大の礫含む
 - 10YR4/3 土 あり 炭化物含む。直径 1cm 大の礫含む。
 - 10YR4/4 土 あり 10YR6/4 砂ブロックを含む。直径 1 ~ 3cm 大の礫を含む。
 - 10YR3/3 粘土 あり 炭化物・焼土含む。直径 1cm 大の礫を含む。
 - 10YR6/6 粘土 あり 地山。
 - 10YR5/4 土 なし 10 直径 1cm 大の礫含む。
 - 10YR3/3 粘土 あり 炭化粒含む。直径 1cm 大の礫含む。
 - 10YR2/2 粘土 あり 炭化物、焼土粒含む。10YR4/4 粘土粒少量含む。SK1 覆土。

TR-3

-W

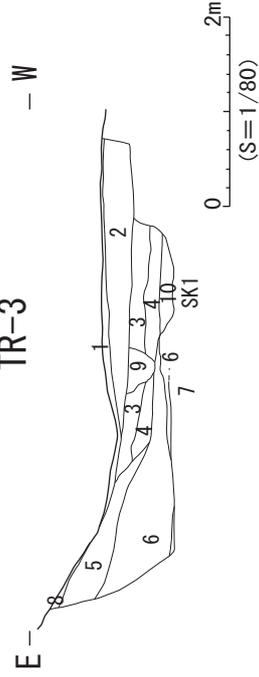


図 14 手ノ子西館周辺トレンチ断面図 (2)

ラボコード	測定試料名	試料情報	試料状態	処理
YU-6995	TNK-1	SK-1 炭化物サンプル	2.082mg をグラファイト化 に使用	AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 0.01M NaOH 80 度 1 時間 (1 回) 0.1M NaOH 80 度 1 時間 (4 回) 1M HCl 80 度 1 時間
YU-6996	TNK-2	SD-1 炭化物サンプル	2.081mg をグラファイト化 に使用	AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 0.01M NaOH 80 度 1 時間 (2 回) 0.1M NaOH 80 度 1 時間 (4 回) 1M HCl 80 度 1 時間
YU-6997	TNK-3	SP-5 炭化物サンプル	2.226mg をグラファイト化 に使用	AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 0.01M NaOH 80 度 1 時間 (5 回) 1M HCl 80 度 1 時間
YU-6998	TNK-4	TR-1-8 炭化物サンプル	2.234mg をグラファイト化 に使用	AAA 処理 1M HCl 80 度 1 時間 0.01M NaOH 80 度 1 時間 (1 回) 0.1M NaOH 80 度 1 時間 (5 回) 1M NaOH 80 度 1 時間 (1 回) 1M HCl 80 度 1 時間

表 5 西館周辺 炭素年代測定資料の一覧

測定番号	試料名	$\delta_{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
YU-6995	TNK-1	-25.63 \pm 0.21	1716 \pm 21	1715 \pm 20	260AD (19.2%) 280AC 325AD (49.0%) 381AD	254AD (34.1%) 304AD 313AD (61.3%) 390AD
YU-6996	TNK-2	-24.44 \pm 0.31	1846 \pm 21	1845 \pm 20	130AD (68.2%) 214AD	89AD (3.0%) 101AD 123AD (92.4%) 235AD
YU-6997	TNK-3	-21.34 \pm 0.27	346 \pm 20	345 \pm 20	1488AD (27.8%) 1523AD 1572AD (40.4%) 1680AD	1466AD (38.7%) 1530AD 1540AD (56.7%) 1635AD
YU-6998	TNK-4	-23.83 \pm 0.27	338 \pm 20	340 \pm 20	1495AD (21.4%) 1524AD 1558AD (34.1%) 1602AD 1615AD (12.7%) 1631AD	1478AD (95.4%) 1636AD

表 6 西館周辺 炭素年代測定の結果

報告書抄録

ふりがな	ちょうないいせき はくつちょうさほうこくしょ							
書名	飯豊町内遺跡発掘調査報告書（3）							
副書名								
巻次								
シリーズ名	飯豊町教育委員会埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第7集							
編著者	高橋拓							
編集機関	飯豊町教育委員会							
所在地	山形県西置賜郡飯豊町大字椿 2888 番地							
発行年月日	2018年3月31日							
ふりがな 調査地・遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中区・天養 寺館周辺	やまがたけん 山形県 にしおきたまぐん 西置賜郡 いいでまち 飯豊町 おおあごなか 大字中 1380-3	403	056	38度3分49秒	139度59分12秒	2018年 6月 ～ 2019年 3月	79.5㎡	分布調査
手ノ子区・ 手ノ子西館 周辺	やまがたけん 山形県 にしおきたまぐん 西置賜郡 いいでまち 飯豊町 おおあごてのこ 大字手ノ子	403	060	38度0分39秒	139度57分24秒	2018年 5月 ～ 2019年 3月	25.58㎡	分布調査

写真図版



石敷供養 (D トレンチ)



階供養正面 (E トレンチ)



階供養右面 (E トレンチ)



石仏群集中域 (N、O トレンチ)



天明七年の石標 (D トレンチ)



観音堂横で倒れていた石碑



観音堂横で倒れていた石碑 (立て直し後)



Aトレンチ



Bトレンチ



Cトレンチ



Dトレンチ (石畳)



Eトレンチ



Fトレンチ



Gトレンチ



Hトレンチ



天養寺跡の石積み



I トレンチ



J トレンチ



虎口への道



K トレンチ



L・M トレンチ



N トレンチ



O トレンチ

図版4 天養寺館周辺の分布調査(4)



寛永通宝の出土状況（L、M トレンチ）



火災遺物の出土状況（J トレンチ）



D トレンチ 手水鉢付近



G トレンチ出土遺物



K トレンチ 2 層 出土遺物



Kトレンチ 3層 出土遺物



Jトレンチ出土遺物（陶器など）



Jトレンチ出土遺物（土壁）



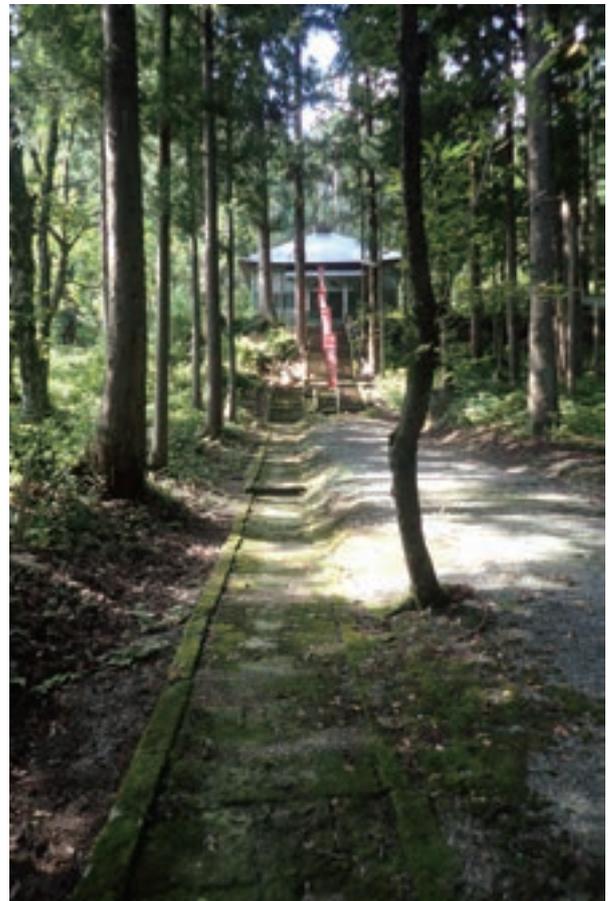
Jトレンチ出土遺物（磁器近世～近代）



Jトレンチ出土遺物（現代）



Jトレンチ出土遺物（現代）



天養寺観音堂



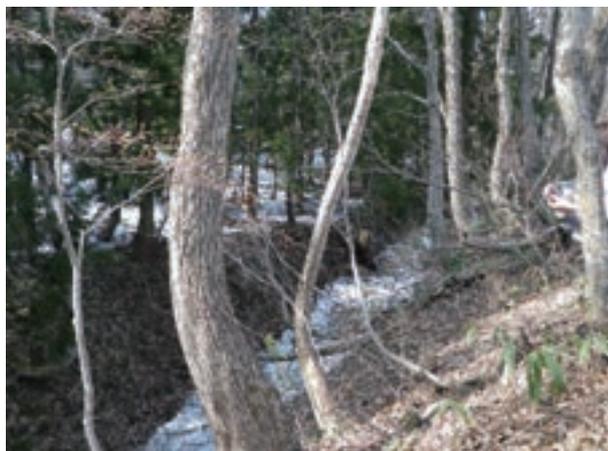
西館遠景



東側土塁



西側土塁



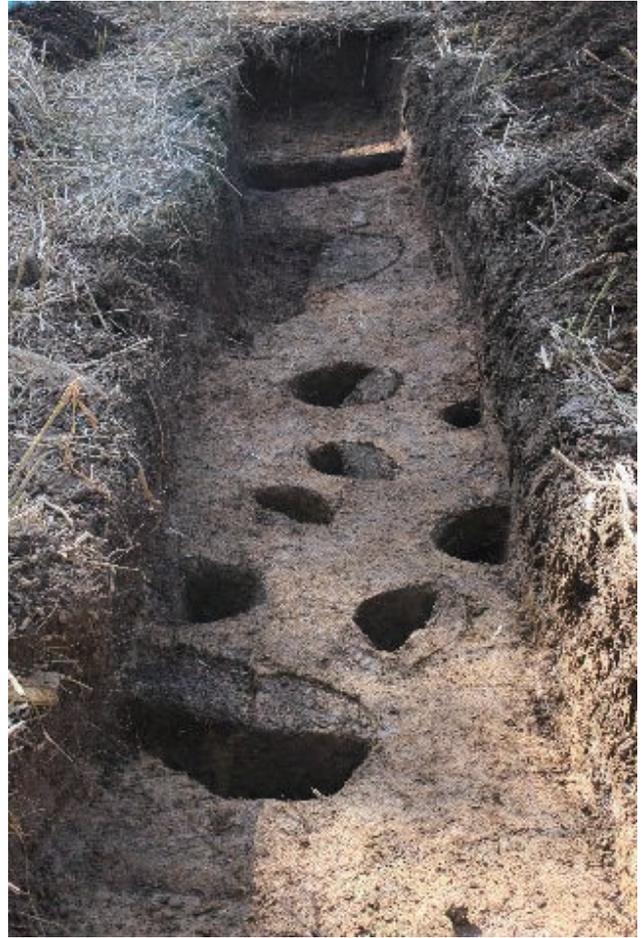
西側堀痕



東側堀痕



トレンチ1



トレンチ1 遺構



トレンチ1 土塁断面



トレンチ1 SP7



トレンチ3



トレンチ3 土塁断面

図版8 西館周辺の分布調査(2)

